

日本および台湾のメディアにおける登場人物が台湾の若者に与える影響 — 国民的イメージおよびパラ社会的相互作用 (Parasocial Interaction) を中心に —

張 淑 鳳

【問題と目的】

テレビが人間にもたらす影響力はすでに様々な先行研究によって検証された。特に外国の情報を入手する際についても、主な媒介としてわれわれの日常生活に影響を与えており、外国の番組の登場人物は、その国に対するイメージを形成する可能性もある。したがって、テレビにおける登場人物が、われわれの価値観や生活様式など様々な側面に大きな影響をもたらすと考えられる。そこで、本研究では、テレビの登場人物を中心として、国民的イメージおよびメディアのPSI (parasocial interaction) 理論について一連の研究を試みる。PSIというのは、HortonおよびWholは1956年にパラ社会的相互作用 (parasocial interaction; 以下、PSIと略す) という概念を提出した。これは、視聴者が、ラジオやテレビなどの登場人物と現実会話をしているように感じていることを指す。この相互作用は、視聴者が、テレビ登場人物に対して一方通行的な親密な関係を想像していると定義されている。

【研究1】

目的

研究1においては、「日本人」、「台湾人」、「自己」に分けてデータを収集し、自分は他国の日本人、自国の台湾人、自己といった3つの対象において、どのようなイメージを有するのか、また三者での異なる反応が示されるかどうかを確かめることである。すなわち、3つの対象（「日本人」、「台湾人」、「自己」）に対するステレオタイプを明らかにすることとする。さらに、日本、及び日本人に対する接触経験があるかないかで、どのような違いがあるのかあわせて検討する。

また、本研究が先行研究と異なる点は、典型的な台湾人と典型的な日本人に対して、評定者が具体的に想定している人物の名前、性別、年齢、職業を尋ねた上で、そのステレオタイプの対象を把握することを可能にするものである。

方法

＜調査対象および手続き＞2002年9月下旬に、台北市内の私立S大学の大学生249名（男性47名、女性202名）を対象に質問紙調査を実施した。＜質問紙の構成＞回答者に典型的な日本人、典型的な台湾人、自己について

SD法による特性形容詞対尺度を7段階で評定させた。また、日本や日本人に対する経験などの項目について尋ねた。

結果と考察

研究1では、台湾人大学生を対象として、台湾人、日本人、自己に対するそれぞれのイメージを検討した。この結果により、日本人のステレオタイプについては、自分の知り合いよりも、芸能人および政治家のほうが多く、外国人に対するステレオタイプはほぼマスメディアを通じて形成されることが改めて裏付けられた。台湾におけるケーブルテレビの普及のため、国境を越えて日本の番組が放送されるようになったため、頻りに日本のテレビ番組を視聴することができるようになった。それゆえ、台湾人大学生が日本人をイメージする際に、自然にメディアによる人物を漠然と思いつかべていると考えられ、日本人に対して固定的なステレオタイプが形成されてしまう。

また、自国民をイメージをする際にも、個人的な面識のない政治家やその他テレビの登場人物によって形成されるイメージを参照していることがわかった。したがって、テレビが国民的ステレオタイプの形成に大きな役割を果たしていることがうかがえた。われわれはテレビにおける登場人物から国民的ステレオタイプ、特に日常生活において接触があまりない国民に対するステレオタイプを得ている可能性が高いといえよう。一方、台湾の大学生がもつ自己のステレオタイプが、一般的な台湾人にも若者文化を大きく影響する日本人にも似ていないことが判明した。これは予想に反した結果である。日本の流行文化に対する情報はメディアを通じて大量に入手できるようになり、台湾人大学生のファッションや生活様式を強く影響していると考えられ、日本に対する同一視がみられるのではないかと思われたが、そのようなことは確認されなかった。要するに、台湾の若者は、日本に同一視するのではなく日本の流行文化に同化しているといえよう。

また、対日好感度が高い場合および回答者が日本に憧れを持っている場合、日本人に対する一部好意的なステレオタイプを保持していることが示された。一方、対日経験の有無や日本のテレビ番組の視聴量による影響が現れなかった。

研究1の結果から明らかになったことは、台湾人大学生の日本人に対するイメージは、大部分がメディアを通して形成されることである。すなわち、多くの外国人に対するステレオタイプはメディアを通じて形成されることを確認した。しかしながら、研究1では、メディアそのものに注目していなかったため、研究2では、マスメディアの登場人物の影響について調べることにある。

【研究2】

目的

本研究では、台湾の学生を対象にテレビの利用と満足がテレビの視聴動機に与える影響を検討することが目的である。特にパラ社会的相互作用を中心に考え、日本のメディア・パーソナリティとのPSIがどのような要因によって影響されているのかについて追究する。

台湾ではケーブルテレビの普及によって日本番組が頻繁に放送されるようになったため、日本のテレビ番組の登場人物に接触する機会も多くなってきた。日本のドラマや芸能情報番組がリアルタイムで放映されているため、ドラマの主人公の俳優も高い人気を得ている。そのような俳優に対し番組の中で「接触」することを通してPSIを形成することが考えられる。PSIの研究は主にアメリカを中心として行われているが、アジアではこの概念そのものがなじみがない。したがって、本研究では台湾の学生を対象としてPSIを検討することを試みが、上述した通り、テレビに対する親近性、テレビの現実性に対する認知、視聴量、およびテレビの視聴動機との関連を調べる。

本研究の目的は、まず、メディアの利用と満足の研究枠組みに基づき、台湾の学生がテレビに対してどのような視聴動機を持っているかを明らかにすることである。その中で、日本のメディアにも注目し、PSIを中心に日本のメディア・パーソナリティの影響を検討する。

また、従来のPSIに関する研究では、ある特定の番組やニュースに対する登場人物について検討したものが多かった(Levy, 1979; Houlberg, 1984; Perse, 1990; Lewis, 2000)。しかしながら、本研究では、対象とするテレビに登場する人物を特定せず質問し、登場人物の名前、性別、年齢を回答させ、それらの情報を基にして、好きな登場人物を把握する。よって、どちらの国の登場人物を選択しているかという結果を通して、テレビが他文化に与える影響を検討することが可能であると考えられる。

方法

＜調査対象および手続き＞2003年3月および中旬から4月中旬に、台北市内の中、高、大学生459名(男

性173名、女性286名)を対象に質問紙調査を行った。＜質問紙の構成＞①テレビ親近性尺度(Rubin, 1979)。②テレビの現実性に関する認知尺度(Rubin, 1983)。③PSIの測定: API尺度(Auter, 1992)およびパラ社会的相互作用の潜在性尺度(parasociability; Auter, 1992)の総合得点を計算し、PSIの得点とした。④テレビの視聴動機尺度(Greenberg & Frank, 1979; Rubin, 1977)。

結果と考察

研究2では、テレビに対して対する視聴動機には、リラックス、情報収集および暇つぶしの3つがあることを明らかにした。これは、Greenberg (1974), MRubin (1977), Palmgreenら (1979) およびPerse (1987) が提唱している欲求充足タイプに類似している。また、PSIの対象の属性からみると、台湾の若者が親しむ外国人の登場人物の中では、日本人の登場人物が最も多く、彼らは日本のテレビの登場人物に影響されていることが考えられる。すなわち、若者は日本のテレビの登場人物を通してファッションや生活様式がある程度影響されていると考えられる。また、PSIの性差について、女性のほうが高い水準のPSIを示した。一方、男性でも女性でも、同性のタレントより異性のタレントに対するPSIのほうが顕著であった。また、PSIのタレントに対する同一視の結果によると、他国の日本人のタレントより自国のタレントに対する同一視が強く示された。蘇ら(2000)によると、台湾の長い植民地化の歴史にもかかわらず、台湾人は他文化に対して受容的である一方、他国に同一視することもない。今回の調査では、蘇ら(2000)議論に沿う結果が得られたといえる。台湾人の若者はメディア登場人物の国籍を問わず、PSIを無差別的に行っている。また、リラックスのテレビの視聴動機が全体、日本人、台湾人の登場人物に対するPSIを予測することが明らかとなった。しかし、テレビに対する親近性およびテレビの現実性に関する認知は、PSIと正の関係を示したが(Rubin, 1985; Rubin & Perse, 1987; Perse, 1990)、今回の調査ではテレビの親近性および現実性に関する認知は登場人物の国籍とは無関係に、PSIを予測できないことがわかった。一方、先行研究ではテレビの視聴量およびPSIと正の関係が明らかにされているが(Rubin, 1985; Perse, 1990)、研究2では視聴量がPSIを予測できないという、矛盾した結果になってしまった。したがって、台湾の若者にとって登場人物に対するPSIは、単なる視聴によるものではなく、それよりも登場人物に対する信頼に基づいている可能性が示された。

【今後の課題】

本論文について今後の課題として、以下の点を提案する。

1. 文化受容度について検討すること。

本研究は実態を調べたに過ぎず、異文化受容のアプローチについて十分に言及していない。我妻ら（1967）は日本人の人種や民族への社会的距離を測定した。これによって、人種や民族に対する受容度を判断することができる。より具体的に台湾人は日本文化にどのくらい深く影響されているのか、我妻らのような異文化受容度の研究を踏まえ、今後は日本（人）の受容度を追究することが期待される。

2. テレビの登場人物に対するPSIの形成原因および持続性を検討すること。

研究2では、単に視聴者がテレビの登場人物に対してどのようなPSIを行っているのかを検討することにとどまっているが、PSIの形成原因やプロセスと、PSIの持続性を研究することが望まれる。Rubin（1985）は人間の孤独感による社会的相互作用のニーズがPSIを予測するというモデルを提案した。これによって、PSIの形

成原因は個人の心理的な要因から説明することができると考えられる。また、対人関係の持続性のようにPSIの持続性もあると考えられる。したがって、縦断的な研究を用い、同じ視聴者を対象として特定のテレビの登場人物に対するPSIの持続性を検討することが期待されている。

3. PSIの日本語版および中国語版尺度を開発すること。

PSIの研究については、1956年にHortonらが提唱して以来アジアでは行われていない。しかし、欧米で開発されたPSI尺度に従い、英語で表現されている内容のまま、使用されることには多くの文化的バイアスを放置したままになる。したがって、翻訳が共通の意味をもつかどうかきわめて重要な条件である。さらに、西洋と東洋の文化差という問題も考えられる。PSIの台湾や日本特有のPSIの特徴を把握している文化特有の尺度の開発が必要である。最低でも、翻訳版に依存する場合、意味的な等価性が保障されているかどうかを確認する必要性がある。専門知識と英語能力の両方を高度にもつ研究者による尺度の翻訳で対応することが当面の課題といえよう。